

次回の定期演奏会をちょっと予習



©Ayane Shindo



©Marco Borggreve

第215回定期演奏会 ロマン派の末裔

2026年1月24日(土) 13:45開場 14:30開演

指揮/大井剛史 オーボエ/吉井瑞穂*

ドヴォルザーク:交響詩「水の精」Op.107

R.シュトラウス:オーボエ協奏曲ニ長調AV.144*

ラフマニノフ:交響的舞曲Op.45

我らが音楽監督・角田鋼亮さんと共に、20世紀アメリカに響いたロマンティックな傑作たちをお愉しみいただいている本日……に続きまして、次回の定期演奏会(年明け1月24日です)には、広く深い知見としなやかな感性、精緻的確な指揮でオーケストラを美しく磨き響かせる大井剛史さんをお迎えします。

日本指揮界の充実を支える頼もしい大井さんは、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉(現・千葉交響楽団)の常任指揮者、山形交響楽団の正指揮者を歴任されたほか、東京佼成ウインドオーケストラの正指揮者を務めるなど吹奏楽の分野でも大活躍。視野もレパートリーも広いマエストロです。

今回は〈ロマン派の末裔〉と題されたプログラムを指揮されるのですが、ドヴォルザーク、リヒャルト・シュトラウス、ラフマニノフと、ロマン派の残照を燃やした大作作曲家3人が、それぞれ晩年に書いた円熟の傑作たちを揃えています。響きわたるサウンドの底からぐっと胸に迫ってくる哀愁や、無駄を削ぎ落とした練達の表現、はたまた巨匠ならではの語り口……と、オーケストラの陰翳深い表現力をたっぷり味わえる音楽ぞろい。次回もちろん必聴です。

【オーケストラが語る幻想の物語——ドヴォルザーク《水の精》】

今回の幕開けにお聴きいただくのは、チェコの大家アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)の交響詩《水の精》(1896年作曲)です。ドヴォルザークといえば、故国の民族舞曲を芸術作品に編み上げて大ヒットした〈スラヴ舞曲集〉や、交響曲第9番《新世界より》などが人気です。その《新世界より》など、故郷を遠く離れたアメリカで書かれた作品群(音楽院の院長として招聘され、数年ほど渡米していたのです)にもチェコ音楽の色彩が濃く響いているように、彼はどこへ行っても〈ふるさと〉の土の匂いを忘れられない人でした。

そんな彼は、アメリカから帰国して故国で過ごした晩年に、ますますチェコ色が強い作品を幾つも書いています。そのひとつが《水の精》。チェコの国民的な詩人エルベンが民話をもとに書いた詩集『花束』から靈感を得て作曲された交響詩です。

詩のあらすじによれば……とある湖のほとり、ここを支配する水の精が、近くに住む人間の娘を誘惑して母のもとから水中に連れ去り、自分の妻にしまいます。子供も産まれるのですが、娘は、地上の母のもとへ里帰りさせてほしい……と願います。水の精のもとに子供を残して、母と再会することのできた娘でしたが、約束のときが来ても母は娘を帰しません。怒った水の精は、嵐を巻き起こします。おびえる母娘の家には、なにかが叩き付けられる大きな音が。扉をあけてみると、残してきた子供の無惨な姿があったのです。

……というお話を、ドヴォルザークは分かりやすく音楽化しました。すぐ耳に残るテーマやその変化する雰囲気など、物語のどのあたりを描いているのか、音楽ですぐ判ようになっていきますから、初めて聴くかたでも、オーケストラの語り口をお愉しみいただけるはず。

なんといってもセントラル愛知交響楽団は、チェコの名匠レオシュ・スワロフスキーさんを音楽監督に迎えていた時代(2014～19年/現・名誉音楽監督)に、彼のお国ものであるドヴォルザーク作品をたくさん演奏して表現の勘所を深く学び取り、培ったものは今も楽団に生き続けています。その上に今回、マエストロ大井の感性が引き出すであろう作品の新しい魅力、楽しみではありませんか。

【リヒャルト・シュトラウス最晩年、自在無碍の傑作!——オーボエ協奏曲】

ドヴォルザークが亡くなった1904(明治37)年、ドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウス(1864～1949)はオペラ《サロメ》の作曲を進めてい

ました。——若い頃から、交響詩『ツァラトゥストラはこう語った』(のちに映画『2001年宇宙の旅』で使われて有名になった曲です)など、大編成オーケストラを豊かに鳴らし切った傑作を幾つも発表してきた彼は、この《サロメ》がスキャンダラスな騒動を巻き起こしつつ大成功を収めたことで、ドイツを代表するオペラ作曲家への道を力強く歩んでゆきます。

——それから40年余。《エレクトラ》《ばらの騎士》など絢爛たるオペラの数々をヒットさせ続けたリヒャルト・シュトラウスでしたが、その晩年には、故国ドイツが第2次世界大戦の戦火に崩れ落ちてゆくのを、ただ見ているしかありませんでした。

ドイツ敗戦後、バイエルンの山荘に引きこもっていた作曲家は、もはやオペラを書くこともなかったのですが……そんな頃、ドイツ占領に進駐してきたアメリカ軍の一隊が、作曲家の山荘を訪れます。そこでシュトラウスと面会した若い軍人のひとり、なんとアメリカの名門・ピッツバーグ交響楽団で首席オーボエ奏者をつとめていたジョン・デランシーという人でした。

彼は作曲家に「オーボエ協奏曲を書く気はありませんか?」と尋ねたのですが、老匠の答えははかばかしくありません。デランシーはそのまま引き下がったのですが……どういうわけか、作曲家はその後しばらくして、オーボエ協奏曲の作曲を始めます。

こうして生まれたのが、次回お聴きいただくオーボエ協奏曲(1945年作曲)です。小編成のオーケストラと共に、独奏オーボエが生き生きと歌い舞う傑作となりましたが、作品誕生のきっかけとなったデランシーは完成時には既に帰国しており、世界初演は別の奏者が担当。アメリカ初演も(楽団の都合で)別の奏者が吹くなど、巡り合わせに恵まれなかったのは可哀想な話です(幸いなことに、デランシー晩年に有志オーケストラと共演した録音が遺されています)。

大作作曲家晩年の、自在な筆致が美しく翔びかう傑作にして演奏至難な逸品、次回定期では名手・吉井瑞穂さんを独奏にお迎えします。マーラー室内管弦楽団の首席奏者時代から、アバドやヴァント、アーノンクール、ブーレーズといった巨匠指揮者たちの信頼もあつく、ソロや室内楽でも高い評価を受け続けてきた世界的名匠が、その確かな解釈と深い美音でシュトラウスの世界を拓きます。必聴です!

【郷愁と孤独と……ロマンのすべてが爆発する大作——《交響的舞曲》】

そして後半は(本日の定期でも作品をお聴きいただいている)ロシア出身の作曲家、セルゲイ・ラフマニノフ(1873~1943)が、生涯の最後に完成させた力作《交響的舞曲(シンフォニック・ダンス)》(1940年作曲)をお聴きいただきます。

20世紀前半を代表する名ピアノistでもあり、一方で作曲家としてはロシア音楽の古き良きロマンを守り通したラフマニノフ。自身で名演を遺したピアノ協奏曲のほか、交響曲も3作書いていますが、そうした大作にならぶ規模をもつオーケストラ曲として、晩年の熟練をさらに自在な幻想へと羽ばたかせていったのが、この《交響的舞曲》です。

演奏会のテーマにふさわしく、なにしろロマンティックな傑作です。オーケストラに溢れるリズムと歌の奔流……耽溺すれすれまで美しく酔わせる詩情や、懐古的ながら力強い抒情。ここには、20世紀の前衛的な音楽が排除していった要素を、逆に敢えてすべて詰め込んでいったような感すらあります。躍動するそのリズムにも、苦い孤独と深い優しさや遠い郷愁とが溢れかえる、引き裂かれた感情のダンス……。楽器編成には珍しくアルト・サクソフォンも加えられ、その甘美な音色がまた、胸を締め付けるような哀愁を醸し出すのも聴きどころ。

オーケストラの各パートもソリストィックな活躍を魅せますし、その精緻なアンサンブル、強靱な表現力まですべてを満喫できる作品です。フィナーレの(身体を揺らすほどの!)爆発的な昂揚とその長い余韻まで、聴き手を深くつかんでやまない大作、これこそ生演奏で体感していただきたい音楽です。次回もこのホールでお会いいたしましょう!

やま の たけひろ
山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、朝日カルチャーセンター新宿教室での音楽講座、歌詞対訳など多数。

Profile

